

## はじめに

1分間、目を閉じて身の回りに耳を傾けてみよう。どんな音が聴こえるだろうか。おそらく、日常では気にとめないような音の存在に気付くはずだ。当たり前のことを改めて捉え直すとき、そこには感性が育まれる。このような音に耳を澄ませる教育プログラムである「サウンド・エデュケーション(音の教育)」は、カナダの音楽家、R. マリー・シェーファーによって開発された。シェーファーは、音楽も身の回りの音も包括的に捉える「サウンドスケープ思想」を提唱した人物でもある。

本書は、この「サウンド・エデュケーション」の意義を理論・実践の両面から検討し、目標と評価について新たな知見を構築していくことを主眼としている。その内容は、以下に示すような全8章からなる。

第1章「問題の背景と目的」では、まず現代社会における聴くことの重要性と、その教育的意義について述べる。次に、その教育的意義をより豊かにする方法として、サウンド・エデュケーション、及びその思想的背景であるサウンドスケープ思想について概観する。そして、先行研究に基づいてサウンド・エデュケーションにおける研究課題を明らかにした上で、理論と実践を学際的に融合させた本書の研究の目的を提示する。

第2章「研究方法」では、目的に照らし合わせた研究方法の選択について論じる。また、学際的な研究における2つの共通理解の枠組み「構造構成的サウンドスケープモデル(SCSM)」及び「構造構成的環境教育モデル(SCEEM)」を提示し、本書では質的研究法としてこの2つの研究法を基盤に進めていくことを示す。

第3章「サウンドスケープ思想の特質」は、サウンド・エデュケーションの思想的背景であるサウンドスケープ思想の特質について論じた理論面に関する内容である。ここでは、従来の音楽教育に問題意識を持ち、それを乗

り越えようとした2つの方法論、すなわちJ=ダルクローズの「リトミック」及びシェーファーの「サウンドスケープ思想」について比較する。それらの方向性の共通性や差異から、サウンドスケープ思想の特質を浮き彫りにしていく。

第4章から第6章にかけては、主に実践面について論考したものである。筆者が授業者となっていくつかの視座から実践した事例について考察している。

第4章「環境教育におけるサウンド・エデュケーション」では、環境教育とサウンド・エデュケーションにおける既存の目標を関連付けながら、サウンド・エデュケーションの導入的な実践事例を通して分析を行っていく。ここでは両者の目標に共通点が見いだせることが明らかになるだろう。

第5章「サウンド・エデュケーションから全身感覚へと拡張した環境教育」では、サウンド・エデュケーションから発展的に授業を行った事例について考察する。この実践事例の分析を通して、感性に関する豊かな育ちが示される。

第6章「生活科におけるサウンド・エデュケーション」では、低学年を対象とした教科である生活科における実践事例を通して、豊かな気付きについての考察が展開される。そして、感性の育成に加えて新たな目標が設定できることに言及がなされる。

第7章「目標と評価に関する総合的考察」では、第4章から第6章における授業実践事例の分析を中心に、ここまでの論考を踏まえた総合的な考察を行う。目標については、サウンド・エデュケーションの既存の目標に加えて、「自己肯定感の向上」「他者理解の深化」が設定できることが考察される。そして、新たな目標に応じた評価の枠組みについて検討がなされる。多様性が尊重されるサウンド・エデュケーションに妥当な、柔軟性のある評価の枠組みが構築できるよう論考していく。

最後の第8章「サウンド・エデュケーションの未来」では、本書で示された意義を総括するとともに、今後の展望についても言及する。

サウンド・エデュケーションが開発されてから、四半世紀が経とうとしている。本書での探究が、その発展に少しでも寄与することができれば、望外の喜びである。



音の教育がめざすものは何か  
— サウンド・エデュケーションの目標と評価に関する研究 —

---

目 次

はじめに	1
<b>第1章 問題の背景と目的</b>	<b>1</b>
第1節 現代社会における聴くことの教育的意義	1
第2節 サウンド・エデュケーションとその思想的背景	3
第3節 サウンド・エデュケーションの実践を通しての問題意識	5
第4節 目標と評価の枠組み	7
第5節 研究の課題と目的	9
<b>第2章 研究方法</b>	<b>15</b>
第1節 目的に応じた研究法の選択	15
第2節 共通理解の枠組み①～構造構成的サウンドスケープモデル (SCSM)	16
第3節 共通理解の枠組み②～構造構成的環境教育モデル (SCEEM)	23
<b>第3章 サウンドスケープ思想の特質</b>	<b>29</b>
第1節 新しい音楽教育の動向と音楽（教育）観	29
第2節 歴史的アプローチと比較的アプローチの混合的研究	32
第3節 従来の音楽教育について	34
第4節 J=ダルクローズの音楽（教育）観と方法論	35
第5節 シューファーの音楽（教育）観と方法論	37
第6節 J=ダルクローズとシューファーの関係性	39
第7節 従来の音楽教育の超克を目指した方法論として	43
<b>第4章 環境教育におけるサウンド・エデュケーション</b>	<b>47</b>
第1節 学校教育における環境教育とサウンド・エデュケーション	47
第2節 授業実践の概要	49
第3節 授業実践の分析	53

第4節 環境教育におけるサウンド・エデュケーションの意義	62
<b>第5章 サウンド・エデュケーションから全身感覚へと拡張した環境教育</b>	
.....	67
第1節 聴覚から全身感覚へ	67
第2節 全身感覚を用いた活動の構築	68
第3節 授業実践の概要	74
第4節 授業実践の分析	77
第5節 全身感覚と生活世界	85
<b>第6章 生活科におけるサウンド・エデュケーション</b>	91
第1節 気付きと感性	91
第2節 授業実践の概要	92
第3節 授業実践の分析	95
第4節 意義と可能性の構造化	107
<b>第7章 目標と評価に関する総合的考察</b>	113
第1節 感性の育成と新たな目標	113
第2節 学習評価の枠組みの構築	124
<b>第8章 サウンド・エデュケーションの未来</b>	135
第1節 学校教育の多様な教科・領域への導入	135
第2節 「聴く」ことから、より豊かな「きく」ことへ	138
<b>あとがき</b>	141
<b>引用・参考文献</b>	143
<b>初出一覧</b>	150